

林羅山詩論研究

【關鍵字】 林羅山、詩論、有的放矢、詩論與史論、同一性

2016
16 750021

1583 1657 75 75
75

75 4693

一、撥亂反正之詩論

10 1998

2

710 784

3

(2)

4

3 751

64

120

116

64

648

672

719

749

6

8 12

7

			966 1041		11		
	588	216	804				
234			139		11	10	8
						1060 1142	
12							2

二、林羅山詩論與史論同一の深化

751

13

14

11

572 585

701

15

16

17

11 770

816

18

19

20

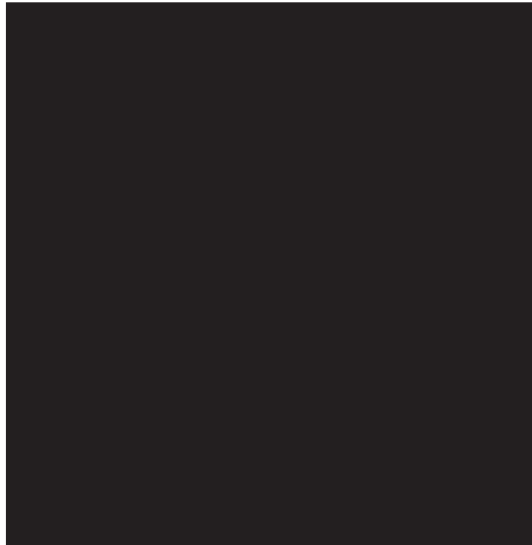
21

1472 1529

22

23

1895 1990



1570

1526 1590

1473 1530

1514

26

1673 1769

27

28

29

30

31

三、結論

註

- 1 1998 12 13
- 2
- 3 2008 204 644
- 4 2000 24 33
- 5 103 106
- 6 367
- 7 301 302
- 8 2013 416 417
- 9
- 10 2013 1 175
- 11 9 181
- 12 1963 190
- 13 4 5
- 14 164 165
- 15 817
- 16 873
- 17 873
- 18 802

29

2013 1 4

30

29 8

31

912

林羅山詩論研究

李 均 洋

【キーワード】林羅山、詩論、目的性、詩論と史論、同一性

林羅山の詩論についての従来の研究は、詩論において羅山が目的としたものや、羅山詩論がその史論と深く結びついていることへの理解に欠けているところがある。

本稿では、羅山の詩論が「撥乱反正」を目的とするものであることを示すとともに、その史論との関係について整理を加えることによって、羅山の詩論が哲学的な深みを持ち、かつ歴史を通じて現在を直視するものであること、すなわちその詩論が朱子学における『易』学を基礎とするものであり、「源平の乱」以来のなまなましい歴史と現実を直視しつつ、奈良時代から江戸時代初期に至る日本の詩壇の盛衰を回顧したものであり、鋭い批判精神に貫かれたものであることを明らかにした。

儒学の「民本」思想に基づく「性情の正を得て、声義の和を保つ」の主張は、羅山詩論の主旋律であり、江戸社会の太平のために詩壇のあるべき姿を示したことは、羅山詩論の交響曲であると言える。